■令和4年度計画における評価一覧

令 和 5 年 8 月 18 日
横浜市公立大学法人評価委員会
資　　料　　3

評価基準 S：年度計画を上回って達成している。または達成の難易度が高い計画を順調に達成している
A：年度計画を順調に達成している
B：年度計画を十分には達成できていない
C：年度計画をほとんど達成していない

評 価 項 目	法人自己評価	委員会（案）	評価	コメント
Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組 5ページ	A	A	A	コロナ禍をはじめ厳しい状況の中でも、かねてより取り組んできたデータサイエンス教育、文理融合、医療と他分野との連携など、教育研究力の向上のための取組に成果が表われつつあることが、プログラム採択状況や様々な指標からもうかがえる。
			A	中期計画最終年度として、ほぼ指標を達成した。コロナ禍で得た新たな取組（ＤＸ等）も、今後に期待できる。
			A	全学的なデータサイエンス教育の推進に向けて、カリキュラムの充実に努め、様々な施策がとられている。研究の質の向上に向けた取り組みも、発表論文数、科研費採択率などに成果が表れている。
			A	多くの指標を達成しているが、研究推進の取組においてはさらに高い成果を達成できると考えられる。
			A	学部の新設、再編など社会情勢の変化に柔軟に対応し、かつ研究の推進において目標を超える結果を示している。
1　教育に関する取組 5ページ	A	A	A	データサイエンスに関する様々な内容・レベルの教育が、全学的あるいは専門の学部・大学院において展開し、充実が図られていることは、本学の大きな特長を形づくるものとして高く評価できる。ＦＤ・ＳＤ、高等教育推進センターによる質保証など、教育の質向上の取組や体制づくりが着実に進められてきている。
			A	ほぼ指標を達成。ＬＭＳの運用開始、ヘルスデータサイエンス博士後期課程の新設等を評価。
			A	全学的なＤＸ推進の施策を積極的に行なったことは、データサイエンス教育の推進とともに、大学のステークホルダーのニーズに応えるものである。領域横断型教育プログラム受講生の数も指標を上回り、学生満足度も高い。ただ志願者総数の伸び悩みに関しては、数値目標の見直しが必要かと考える。
			S	領域横断プログラム、データサイエンス人材育成プログラム、留学生就職促進教育プログラムなど複数の事業認定を受けている。ＡＬ導入率94.3%とアフターコロナでも教育の質を維持し、学生満足度は85.8%と非常に高い。志願者数未達成については現環境下では目標値が高すぎると判断。
			A	学部の新設、再編など社会情勢の変化に柔軟に対応している。
1(1)　全学的な取組				
1(2)　学部教育に関する取組				
1(3)　大学院教育に関する取組				
1(4)　学生支援に関する取組				
2　研究の推進に関する取組 5ページ	A	A	A	Top１０論文数などの高レベルの維持、科学技術振興機構「共創の場形成支援事業」などによる学内外連携による研究推進など、研究力の向上は着実に進められてきている。
			A	ほぼ指標達成。また、ＤＸも推進し、積極的に情報を発信した。
			A	新型コロナ感染症関連技術の開発を始め、主要学術雑誌等への掲載論文数、科研費補助金獲得数、並びに共同受託研究数も目標を上回った。本学が主幹として組織した産学連携形事業が科学技術振興機構の「共創の場形成支援事業」に採択されたことは、ＵＲＡの体制強化など研究支援体制の強化が身を結んだ結果と考える。
			A	科研費採択件数が大きく増加しており、科研費獲得支援の体制が整備されている。一方で「がん研究推進センター」は設置されず、先進医療申請件数や特定臨床研究の実施件数は目標に比べて少なくなっている。
			S	先進医療申請件数以外は目標を大幅に超える成果を上げている。
2(1)　研究の推進に関する取組				
2(2)　研究実施体制等の整備に関する取組				
Ⅱ　地域貢献に関する取組 6ページ	A	A	A	ボランティア支援室による学生ボランティアの育成・派遣の格段の充実、みなとみらいサテライトキャンパスを活かした地域貢献の展開、地域貢献コーディネーターによる地域社会との連携の強化など、連携のための仕組が様々に機能しつつある。みなとみらいキャンパスの活用については、さらに様々な可能性が考えられるところであり、今後の取組の進展を期待したい。
			S	全ての指標達成。特に、ボランティア派遣数は特筆できる。
			A	学生ボランティアの件数、エクステンション講座数は目標値を上まわり、コロナ禍の中、よく健闘した。横浜市との連携として教員地域貢献活動支援事業（地域実践研究）の推進、大学・都市パートナーシップ協議会を通じた活動など、地道な努力を行っている。
			A	地域志向科目の充実、ボランティア支援室の活動の結果、ボランティア派遣数が非常に大きくなっている。横浜市と様々な連携をしているが、市との連携講座数は減少している。
			A	目標を確実に達成している。
Ⅲ　国際化に関する取組 6ページ	A	A	A	コロナ禍の影響もまだ残る困難な状況の中、４年度の学生派遣プログラムを着実に軌道にのせたことは評価できる。海外からの留学生については、今後産業界における人材獲得競争が高まると考える中、留学生就職促進プログラムを新たなプログラム開始も含めて推進しており、今後が期待される。
			A	未だコロナの影響で指標未達が多いが、著しい回復基調にあり、今後、大いに期待できる。
			A	コロナ禍の中、最近３年間は、留学生の受け入れを含めた国際協力は困難であった事が推察されるが、２年次第２クオータープログラムの設定、文部科学省の留学生就職促進プログラムに採択されるなど、国際化に向けた努力を重ねていることは評価出来る。
			A	コロナの影響により取組を進めることが困難となった時期もあったが、当年度においては第２クオータープログラムの構築による渡航プログラムの改善など、速やかな回復ができている。
			B	コロナ禍という汲むべき事情はあるものの、目標を大きく下回っている。

評　価　項　目	法人自己評価	委員会（案）	評価	コメント
Ⅳ　附属２病院（附属病院及び附属市民総合医療センター）に関する目標を達成するための取組 7ページ	A	A	A	２病院の機能をフル活用して、コロナ医療、救急医療、がん医療など社会的要請に応えるべく努力している。がんゲノム医療、最新機器の導入、遠隔ＩＣＵの24時間展開など、医療の高度化にも成果をあげてきていることを評価する。
			A	コロナ対応と質の高い医療提供の両立が求められる中、地域医療機関のリーダーとして、責務を果たした。
			A	新型コロナウィルス感染症対応では、２病院とも神奈川県における高度医療機関として十分に機能した。また癌ゲノム医療連携病院の指定を受け、高度で先進的な医療を提供した。
			A	地域の中核病院として医療提供が行われている。先進医療における臨床研究については引き続き対策を検討する必要があると見受けられた。
			A	コロナ禍で医療を取り巻く状況が混沌としているにも関わらず、ほとんどの目標を達成している。
1　医療分野･医療提供等に関する取組 7ページ	A	S	S	救急医療・感染症医療が最大数値を記録する中、遠隔ＩＣＵ支援センターを24時間365日体制にするなど、必要な医療を効果的に提供できる体制づくりも前進させている。がんゲノム医療については、連携病院としての患者受け入れを進めていることに加え、附属病院ではがんゲノム医療拠点病院の指定申請を行うなど、一層の役割を果たすべく取組を強化している。このような医療提供に関して積極的な挑戦を行ってきていることを高く評価したい。
			S	コロナ禍の影響が残る中、様々な努力、工夫が最も見られる項目であり、大いに評価する。
			A	先進的医療だけでなく、救急医療応需、災害時医療に関して体制強化を図り、着実に成果を上げてきた。手術件数の増加、平均在院日数の減少などは、本年度の目標数値を上回っている。
			S	「がんゲノム医療拠点病院」に指定されている。コロナの影響がありながらも救急受入れは増加傾向にあり、手術件数も効率化による件数増加となっている。また、遠隔ＩＣＵの「支援センター」は、24時間365日体制を実現している。
			S	コロナ禍の混沌とした状況にも関わらず、目標を達成したことは賞賛に値する。
2　医療人材の育成等に関する取組 7ページ	A	A	A	医師・看護師の確保を進めるだけでなく、医師の働き方改革やチーム医療の推進、働きやすい環境作りを様々な面から進めている。
			A	着実に取り組んでいる。特に遠隔ＩＣＵの24時間365日運用開始を評価。
			A	優秀な初期臨床研修医の確保と育成のための様々なプログラム、また多様な研修制度の整備に努めた。また、看護師、コメディカルスタッフ、事務職員の育成を進めるべく、研修制度を含めて様々な施策を行なった。
			A	初期診療研修医のマッチング率100%達成、特定行為研修の継続、働きやすい環境の確保が達成できている。 一方で、労働時間短縮の推進、体制加算の獲得など、引き続き取り組むべきものがある。
			A	コロナ禍の混乱の中でも、確実に目標を達成している。
3　地域医療に関する取組 7ページ	A	A	A	コロナ禍でもいろいろな地域連携に向けた活動は実施しており、目標を必ずしもクリアしたわけではないものの、着実に連携の実績は増加している。転院調整システムの利用対象のさらなる拡大を期待する。
			A	一部、未達成指標はあるものの、地域病院と連携、病院間ＥＣＭＯ連携、ウェブ初診予約の拡充等、地域に貢献。
			A	様々な取り組みにオンラインを活用し、地域の医療機関従事者向けの研修会、市民向けの医療講座などを実施した。地域医療を前に進めるべく様々な施策を行い、成果をあげた。
			A	登録医療機関数17%増加であり、紹介率、逆紹介率は高くなっている。 地域医療従事者への研修、実習受入れなど、地域の拠点病院としての活動が継続的に行われている。
			A	コロナ禍の混乱の中でも、確実に目標を達成している。
4　先進的医療･研究に関する取組 7ページ	B	B	B	臨床研究や治験の受け入れの増加に努力しているが、特定臨床研究など目標達成にいたっていない分野があり、臨床研究中核病院の承認にはいたらなかった。
			A	コロナ禍の中、難しい医療環境の中、着実に取り組んだことを評価。
			B	附属病院の臨床研究中核病院としての承認が得られなかったのは残念。再生医療の実現を目指す、基礎研究から臨床応用に向けた橋渡し研究（トランスレーショナルリサーチ）を推進する体制の構築に向けても、附属２病院と医学部との連携強化が望まれる。
			A	新規治験件数は安定しており、研究支援の新たな取組みとして「よろず相談室」を開催している。一方で、特定臨床研究は目標値を下回っており、臨床研究中核病院の承認申請は承認されなかった。
			B	特定臨床研究は、大学病院に求められる重要な使命であり、今後の奮起を期待したい。
5　医療安全･病院経営に関する取組 8ページ	A	A	A	クリニカルパスの使用率が上がるなど、患者サービスの向上が図られている。（なお、患者満足度が下がっているのは、満足度調査に「普通」という項目が加わったからだけなのか、若干気になるところである。）
			S	ほぼ目標達成。厳しい安全、経営の環境の中、大いに評価できる。
			A	Advance Care Planningの実践を目指したワーキングチーム、臨床倫理コンサルテーションチームの立ち上げのもと、周辺環境の整備が進んだ。医療安全に関する研修受講率も100％と高い。患者の平均在院日数も順調に減少し、当初の目標を達成している。
			A	患者のリスク評価、早期のＳＷとの連携が行われている。医療安全の研修受講率100%を維持。 データ分析による経営が行われている。２病院連携や他病院との情報交換が行われている。 患者満足度は目標に届いておらず満足度につながる活動が求められる。
			A	コロナ禍の混乱の中でも、確実に目標を達成している。

評　価　項　目	法人自己評価	委員会（案）	評価	コメント
Ⅴ　法人の経営に関する目標を達成するための取組 8ページ	A	A	A	コロナ禍においても、ガバナンス強化や外部資金獲得等の努力が積み重ねられ、業務・財務は良好に推移してきた。ただ、既に物価上昇などの影響が現れてきつつあり、今後とも経営改善への努力は強化していく必要がある。
			A	中期計画最終年度として、コロナの難しい局面の中、総じて順調に成果を出した。
			A	コンプライアンスの推進・強化は法人の業務運営において重要な課題である。教職員の意識調査においてコンプライアンス関連の意識が目標指標に届かなかったことは残念であるが、今後も様々な施策をうち、努力して欲しい。
			A	社会の要請を満たしつつ、収支に問題がない経営ができている。
			A	理事長・学長のリーダーシップが発揮できるような体制づくりに進展が見られる。
1　業務運営の改善に関する取組 8ページ	A	A	A	コンプライアンスの充実については、着実に進められている。多様な人的資本を重視した経営は重要であり、教職員のエンゲージメントの強化やダイバーシティ推進の取組については、さらに課題の抽出ときめ細かな施策の推進が望まれるところである。
			A	ＳＮＳ活用等の情報発信、ダイバーシティの推進、ガバナンス強化に注力したが、一部、コンプライアンス、人材育成に課題を残した。
			A	コンプライアンス推進担当、並びにダイバーシティ推進室の設置、創立100周年事業に向けた募金体制の充実など、評価出来る。しかし、大学の知名度、ブランドランキング等では目標数値に届かない状況が続いている。18歳人口が年々減少していく中で、目標数値の見直し、広報も含めた新たな戦略が必要であろう。
			A	コンプライアンス推進担当、ダイバーシティー推進室を設置している。大学発展に向けた施設・設備に関する計画策定が行われている。教職員意識調査におけるコンプライアンス、人事やブランドについて目標達成できなかった。女性管理職、障害者雇用もさらに取り組む余地がある。
			B	内部監査体制の確立が急務と考える。
1(1)　コンプライアンス推進及びガバナンス機能強化等運営の改善に関する取組				
1(2)　人材育成･人事制度に関する取組				
1(3)　大学の発展に向けた基盤整備に関する取組				
1(4)　情報の発信に関する取組				
2　財務内容の改善に関する取組 8ページ	A	A	A	大学については、物価上昇による経費増で法人化初の赤字となったが、今後ともそのような経費増の可能性があることから、コスト削減や収入増の取組をさらに進めていく必要がある。志願者の増加や外部からの支援の拡大につながるよう、発信力の強化も併せて考えていく必要がある。
			A	外部資金の取込みや、ウェブ決済システムの運用等、積極的に基盤強化に結果を出した。
			A	新型コロナウィルス感染症対策による影響を受けながらも、産学連携や文科省関連の補助金等の外部資金を獲得し、また、寄附金獲得への体制も強化し、安定した財務状況を作っている。更に、事務改善により管理的経費の削減にも努めている。
			S	寄附金の獲得ができている。価格高騰という環境においても収支均衡を保つことができている点が高く評価できる。
			A	もともと財政の自由度が低い中で経営改善に向けた努力が見られる。
2(1)　運営交付金･貸付金に関する取組				
2(2)　自己収入の拡充に関する取組				
2(3)　経営の効率化に関する取組				
Ⅵ　自己点検及び評価に関する目標を達成するための取組 8ページ	A	A	A	第３期中期目標期間を振り返った自己点検、評価を適切に実施し、次期計画策定にも適宜活かしていることがうかがえる。
			A	特に問題はない。
			A	年度毎に行われる法人評価委員会、学内経営審議会の外部理事からの指摘事項や意見が生かされる体制が取れている。
			A	中間評価や認証機関の評価を踏まえ、第４期中期計画の策定を行っている。
			A	概ね適切に対応されている。

○ 総合的な評価コメント

	コロナ禍に加え、国際情勢の変化、物価などの経済状況の変化、AIなど情報技術の急激な進展などの変化が法人経営にとって大きな影響を与えた1年であったが、教育・研究・医療の充実に着実に取り組んでいると評価できる。特にデータサイエンス教育の多面的な展開、全学的な教育の質向上の推進、新たな共同研究事業の開始、遠隔ICUなど医療体制の強化を進めており、横浜市立大学の特長が磨かれつつあることを感じる。組織・分野の枠を超え、一体的な改革を進めていただくことを期待している。
	中期計画最終年度として、充分に目標達成。一部、課題も残したが、コロナで得た様々な経験を活かした新たな戦略もスタートし、今後に大いに期待できる。
	大学の教育・研究の質の向上を目指した全学をあげた様々な取り組み、教職員の弛まない努力に敬意を表します。特に本学の代名詞ともいえるデータサイエンス教育に関しては、データサイエンス学部、大学院の発展はもちろんですが、全学的なデータサイエンス教育、つまり全学的なレベルの底上げがどのようになされるのかが、今後益々重要になっていくと考えます。また、新型コロナ感染症の終息が未だ完全でない中で、様々な業務において、オンラインを最大限に生かした対策が取られ、それぞれで成果を出していることも、評価できます。
	YCUミッション、そして取組の基本方針に従い、1つ1つ取り組みを行って達成している。特に、データサイエンス、地域連携、医療拠点、といった点での取り組みを進めていることが分かり、横浜市立大学が果たすべき役割をしっかりと意識していることが感じられる。数値目標があるものについては概ね達成しているが一部は未達成であり、アフターコロナ、SDGs、ダイバーシティー、働き方改革といった様々な要請がある環境においてどのように達成していくか、その目標が妥当かどうかも含めて検討する必要がある。
	コロナ禍で先の見通せない状況にも関わらず、高度な診療体制を維持し、手術件数などの目標を達成した2病院の取り組みは賞賛に値する。 一方、留学関係はコロナ禍で目標未達となっている点は、結果を謙虚に受け入れて良いかと思う。